認知症の人に有効な入口支援と社会参加に至るプロセス
―認知症の人の視点から捉える支援の有効性―

24GM004

要旨

本研究の目的は，認知症の人に有効な入口支援と社会参加に至るプロセスを分析し，認知症の人の視点から有効な支援方法を明らかにする．

研究方法は，認知症カフェやピアサポートなどの社会活動に月 1 回以上，参加している認知症の人を対象に，半構造化面接と参与観察を実施し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析した．

研究結果は，A 県在住の認知症当事者 10 名を対象に，半構造化面接と計 59 時間の参与観察を実施した．分析の結果，13 のカテゴリー・22 のサブカテゴリー・42 の概念が生成された．認知症の人と家族は【生活全体のゆらぎ】のなか【安心の獲得】を求めて〔信頼できる医師との出会い〕と〔備えの効力〕が分岐となり，仲間や支援団体とのつながりから【自己変容】【自己適正の探索】を経て社会参加につながっていた．社会参加を通じて変化したプロセスには【活動動機の芽生え】【自己価値の再構築】【人間関係の肯定的変化】が明らかとされた．認知症の人が望む【個人活動】【社会活動】を実現するためには【手軽な情報へのアクセス】，診療時の【ナラティブ視点の初期ケア体制】により自己価値の再構築がなされる．支援者からの適切なマネジメントにより〔力の獲得〕を行い【豊かな当事者支援】と【当事者性を生かした社会参画】へと広がり，相互の学び合いから認知症への理解ある社会をつくることが示された．

考察として，認知症の人の視点から捉える有効な入口支援には，診断前後の情報アクセスと医師との信頼関係が「空白の期間」の短縮につながり，早期から本人が望む社会参加につながりやすいことが明らかとされた．特に，初期の確定診断時に，本人の葛藤や不安な気持ちを医師に受け止めてもらい，本人の物語（ナラティブ）を丁寧に聴いてもらえた経験が，その後の自己価値の再構築につながっていた．認知症の人に有効な入口支援と社会参加に効果的な支援方法は（1）本人と家族の実情に合わせた手軽に情報アクセスができるシステムづくり，（2）初期診断から人間性（Personhood）を尊重したナラティブな視点を導入したケア体制の構築，（3）本人と家族の生活を広げる社会参加を実現するためのコーディネート，（4）有機的かつ重層的なネットワークの形成が必要と考える．

本研究の意義は，認知症の人の視点から入口支援と社会参加までのプロセスを体系的に示した点にある．今後，認知症の人がその人らしさを発揮して社会参加するためには，初期の段階から本人の物語を尊重した関わりを，医療・福祉・行政・支援団体などの関係者が共通理解して実践できる仕組みづくりや，本人の力を発揮できるための環境と制度をつなぐ支援体制を整えることが重要な課題である．